

最近のトピックス

定期的な歯科受診は歯科恐怖を和らげる Periodic visits allay dental fear

新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻

口腔健康科学講座 小児口腔科学分野

佐野 富子, 田邊 義浩, 柳田 響子, 野田 忠

Division of Pediatric Dentistry, Department of Oral Health
Science, Course for Oral Life Science, Niigata University Graduate

School of Medical and Dental Sciences

Tomiko Sano, Yoshihiro Tanabe,

Kyoko Watanabe-Yanagida, Tadashi Noda

【はじめに】

世界各国で、強い歯科恐怖を抱く者の割合は5～22%と報告されている¹⁾。それらの患者は、歯科に対する恐怖心により歯科治療を十分に受けることができず、その結果、口腔の健康が損なわれる可能性も否定できないため大きな問題となっている。

歯科に対する恐怖心は様々な原因から生じるが、幼児期のトラウマ的な歯科治療経験、特に痛みを伴った経験に基づくものが多いと報告されている。また、不適応児の治療の際に危険防止のために適用される身体抑制具が問題として取り上げられる場合も多い。

歯科恐怖症の多くは医原性であり、小児期の適切な歯科医の対応により予防が可能であるとされる。しかし、従来の報告は被験者の記憶に頼っているところが多く、これまでに実際の診療録から客観的に歯科恐怖と過去の治療経験との因果関係を調査した報告は少ない。また、小児期の歯科的管理のみならず、小児期から青年期にかけて行う継続的な定期診査が、青年期の歯科恐怖の発症にどのような影響を与えているかを調査した報告は、著者らの検索した限りみられない。

そこで、青年が有する現在の歯科に対する恐怖心と、過去の歯科治療経験の関係を明らかにし、継続的な歯科的管理を行っている継続群と、行っていない非継続群で比較検討した結果について、紹介する。

【対象および方法】

Dental Fear Survey (DFS) はKleinknechtら²⁾が考案したアンケートで、歯科治療に関する設問に5段階で回答し、その点数分布より歯科恐怖・不安の程度を判断

するものである。その設問内容は歯科からの回避、生理的反応および刺激に対する恐怖の3要素から構成されている。今回はこの設問の20項目を和訳し、調査に用いた(表1)。

表1 DFS (20問)

設問	設問内容
1	歯科医院の予約を延期したことがありますか
2	歯科医院の予約日に無断で受診しなかったことがありますか
3	歯科治療時、体がかたくなりますか
4	歯科治療時、呼吸は早くなりますか
5	歯科治療時、汗をかきますか
6	歯科治療時、気分が悪くなったり吐き気を催すことがありますか
7	歯科治療時、心臓の鼓動が早くなることがありますか
8	歯科医院で次回の予約を取っている時、不安を感じますか
9	歯科医院に近づく時、不安を感じますか
10	待合室で待っている時、不安を感じますか
11	診療台に座った時、不安を感じますか
12	歯科医院独特のにおいをかいだ時、不安を感じますか
13	歯科医師を見た時、不安を感じますか
14	注射の針を見た時、不安を感じますか
15	注射をされた時、不安を感じますか
16	歯を削る器械を見た時、不安を感じますか
17	歯を削る器械の音を聞いた時、不安を感じますか
18	歯を削られている時、不安を感じますか
19	歯科医院で口の中をきれいにされる時、不安を感じますか
20	歯科治療全般について考えた時、不安を感じますか

昭和59年から平成元年までの間に初診した者のうち、幼児期に新潟大学医歯学総合病院小児歯科診療室で身体抑制具(レストレイナー[®])を用いて歯科治療を行った青年に対し、研究の主旨を説明した文章とともにアンケート用紙を郵送した。有効回答の得られた継続群45名(平均年齢16歳7か月)、非継続群51名(平均年齢17歳5か月)の回答を集計した。治療歴に関しては、初診から4歳までの診療録の記載内容を調査した。

両群間のDFSの結果や歯科に対するイメージ、治療歴について集計し、新潟大学教養課程の学生を対象として行った日本人一般青年の調査結果³⁾と比較検討した。

【結果および考察】

表2に示すように4歳以下の平均来院回数は継続群9.82回、非継続群7.47回で、ほとんどの受診の際にはレストレイナー[®]を用いて診査や治療が行われていた。受診の内訳をみると、両群間で充填処置や乳歯冠装着、歯髓処置、抜歯等の実際に行った歯科治療回数には有意な差を認めなかった。

非継続群の設問毎のDFS点数分布は、日本人一般青年³⁾の分布に類似しており、表3に示すように20設問の合計

【おわりに】

表2 4歳以下の平均治療回数

	継続群	非継続群
来院回数	9.82 *	7.47
(レストレイナー使用回数)	7.40	7.33
(浸潤麻酔経験回数)	3.21	3.02
内訳		
診査のみ	2.58 *	1.35
レジン充填, 乳歯冠のみ	5.63	4.59
歯髄処置を含む治療	1.49	1.41
抜歯を含む治療	0.12	0.12

* p<0.05 単位:回

表3 DFS値

	継続群 (45名)	非継続群 (51名)	一般青年 ³⁾ (231名)
DFS値	34.60 **	45.41	45.15
SD	15.44	19.26	17.82

(** p<0.01)

点数 (DFS値) も非継続群45.41, 日本人一般青年45.15で同程度となった。これに対し, 継続群のDFS値は34.60で, 両群に比べ有意に低い値を示した (p<0.01)。また, 歯科に対して怖い・不安・嫌い等の負のイメージを持つ者の割合は, 継続群で22.2%, 非継続群で39.2%, 一般青年で45.5%を占めた。

一連の調査³⁻⁵⁾において, 幼児期に同じ環境下で歯科治療を行った集団を対象にDFSを行い, その後の定期診査の有無により2群に分けて検討したところ, 4歳以下の歯科治療以降, 青年期にかけて定期診査を行うことにより歯科に対する恐怖心は少なくなることが示された。また, 幼児期に身体抑制具を用いて歯科治療を行い, その後何らかの事情で定期診査を継続できなかった場合でも, 一般青年と同程度の恐怖心であることが示された。

これまで, 小児歯科臨床では, 歯科恐怖の予防という観点から, 治療に適應できない幼児への対応に重点がおかれてきた。しかしながら, 幼児期以降の対応も青年期の歯科恐怖心に大きな影響を与えることが明らかとなったことから, 心理的負担をかける機会の多い小児歯科では, 長期にわたる定期診査を通じて, 良好な信頼関係を築いていく必要があることが示唆された。

身体抑制具の使用の是非については, 従来より賛否が問われてきた。一般的に小児歯科臨床においては, 非協力児に緊急に処置を行う際のやむを得ない対応法として位置づけられる傾向にある。しかし, 当診療室では, レストレイナー[®]を歯科治療時の安全ベルトとして位置づけ, 低年齢児の初診の際には車のシートベルトのように, ほぼ全員に使用していた。これは, レストレイナー[®]が患児の不適応に対する懲罰的な意味を持たないように配慮しているためである。

本調査では, 当診療室でのレストレイナー[®]の使用と, その後の歯科恐怖心は関係がなく, その後の定期的な歯科受診は恐怖心を和らげる効果があることが明らかとなった。

同時に今回の結果では, 両群ともにDFS値は広くばらついており, 心理的要因の関与が推察されたことから, 個々の患者の特性不安に合わせた慎重な対応が必要であることが示唆された。最近, 我々は小児の歯科治療と, そのストレスの関係について, 唾液中のストレスマーカーを指標とした生化学的な検証を試みている。客観的な評価が難しいとされる, 歯科治療時の不安やストレスを定量化し, これを軽減するための臨床的な対応法を開拓することは, 将来の歯科恐怖症の発症を予防する上で重要と考えられる。

【参考文献】

- 1) Ter Horst, G. and De Wit, C. A.: Review of behavioural research in dentistry 1987-1992: Dental anxiety, dental-patient relationship, compliance and attendance, *Int. Dent. J.*, 43: 265-278, 1993.
- 2) Kleinknecht, R. A., Klepac, R. K. and Alexander, L. D.: Origins and characteristics of fear of dentistry, *J. A. D. A.*, 86: 842-848, 1973.
- 3) 佐野富子, 田邊義浩, 野田 忠: 歯科恐怖に関する研究 一第1報 歯科恐怖に関する研究—第1報 歯科恐怖に関する研究—を用いた調査—, *小児歯誌*, 39: 865-871, 2001.
- 4) 佐野富子, 田邊義浩, 野田 忠: 歯科恐怖に関する研究 一第2報 小児期の歯科治療経験との関連—, *小児歯誌*, 39: 1059-1068, 2001.
- 5) 佐野富子, 柳田響子, 田邊義浩: 歯科恐怖に関する研究 一第3報 幼児期の歯科治療経験とその後の定期診査の影響—, *小児歯誌*, 41: 539-548, 2003.